

2024年4月21日 説教「受けるより与えるほうが」

使徒の働き 20章 31～38節

ミレトにエペソ教会の長老達を呼びよせて、パウロは語りました。まずは謙遜を語り、次には走るべき行程において任務を全うする覚悟を伝えた上で、彼らに教会の牧会を託しました。

## 1. 目をさましていなさい (31～32節)

①訓戒を続けた3年(31)「ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。」

パウロはエペソの地にも狂暴な狼のような存在が教会を荒らし、内側からも曲がった教えを語る者が現れる可能性を語りました。だからこそ、彼らには「目を覚ましていなさい」と訴えかけたのです。そして、3年にもわたってエペソに滞在して、御国の福音を夜昼たがわず、時には涙を流しつつ、教えてきたことを、もう一度思い出すべきことを伝えました。パウロはかの地では何もかも伝えてきた自負がありました(27節)から、それらを思い出さないと伝えているのです。

②神と御言葉にゆだね(32)「いま私は、あなたがたを神とその恵みとその恵みのみことばとにゆだねます。」

パウロは愛するエペソの教会とその兄弟について、神さまにゆだねることにしました。再度エペソに行く見込みはないのですから、その群れについては、恵みの主にお頼りするしかないのです。それと、あとは恵みの御言葉に全面的な信頼をもち、御言葉自身がその御力によって導きが表示されるということを感じたのです。

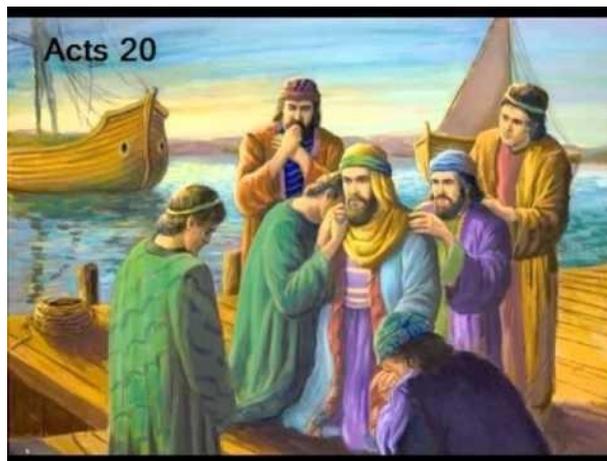
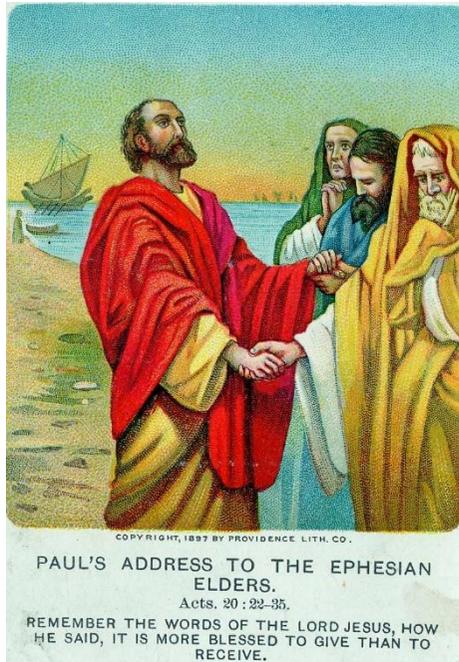
③みことばの力(32)「みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中であって御国を継がせることができるのです。」

御言葉こそは、エペソの教会の人々を育成するために、主が用いられる原動力なのです。また、御言葉は聖徒たちのなかであって、御国を継承させる土台だということです。パウロが御言葉の力にゆだねたように、エペソの教会の長老たちも、御言葉の力を教えられて、励ましと慰めをもらったことと思われます。

## 2. パウロの働きの精神 (33～35節)

①むさぼったことはない(33)「私は、人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。」

一般の人々の欲しがるものは、当時も今も変わらず、裕福な生活をするためのお金や財でありました。しかし、パウロは明言したのでした。「人の金銀や衣服をむさぼったことはない」と。キリストの福音が広がることをひたすらに考えていたパウロにとって、金銀や衣服は道具でした。必要に応じて与えられ、用いるものだったのです。



②この両手を (34)「あなたがた自身が知っているとおりに、この両手は、私の必要のためにも、私とともにいる人たちのためにも働いて来ました。」

エペソの長老達もパウロの生きる姿勢、宣教への情熱、人々への愛については、肌で感じ取ってきました。パウロは、「この両手は、私の必要のためにも、私たちとともにいる人たちのためにも、働いてきました」と述べて、与えられている体、能力、賜物、財などすべてを、キリストの教会の建て上げのために用いてきたということを証したのです。

③弱い者たちを (35)「このように労苦して弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、『受けるよりも与えるほうが幸いである』と言われたみことばを思い出すべきことを、私は、万事につけ、あなたがたに示して来たのです。」

パウロにとっては福音の広がりを進めることが第一の関心でしたが、現実生活を歩む教会内外の弱い者たちへの関心も強くありました。彼らを助けなければという願いがありました。そして、それらの働きをするなかに、いつも心にとめてきたのが、主イエスの教えた。すなわち、『受けるよりも与えるほうが幸いである』というもので、これをいつも覚えるべきことをエペソの長老たちにも訴えかけたのでした。

### 3. エペ (36～38 節)

①役立 (36)「こう言い終わって、パウロはひざまずき、みなの方とともに祈った。」

訣別の説教を締めくくってから、パウロはひざまずきました。エペソの長老たちとの、別れをするために、祈りをともにすることが、優先しました。彼らと心を合わせて祈ったのです。エペソの教会のため、長老たちの働きのため、パウロのこれからの迫害をも辞さず進む道のことなどが祈られたことでしょう。

②悔い (37)「みなは声をあげて泣き、パウロの首を抱いて幾度も口づけし、」

一同は、あたりを構わず、声をあげて泣きました。そして、パウロの首を抱いて、幾度も口づけをしました。それほどに、エペソの教会にとって、パウロの働きと、その愛は、大きなものでした。

③促さ (38)「彼が、『もう二度と私の顔を見ることはないでしょう』と言ったことばによって、特に心を痛めた。それから、彼らはパウロを船まで見送った。」

今生の別れの場面です。パウロが「もう二度と私の顔を見ることはない」と言ったことにより、悲しさは増長したのです。しかし、天上においては、再び会えるということをパウロは暗に伝えていたと思われます。そして、別れの見送りです。長老たちは、パウロがミレトの港からエルサレムに向かうとする船まで行き、見送ったのです。

《結論》 パウロからエペソの長老たちへの訣別説教の最後の部分を読みました。エペソの長老たちとの訣別の場面は、読む者の心を揺さぶります。

その説教のなかにおいて、今朝学びたいのは、35 節にある『受けるよりも与える方が幸いである。』というお言葉です。これは、主イエスが伝えられた言葉として、引用されています。ところが、この御言葉は福音書のどこにも記されていないのです。パウロがどのようにして、この御言葉を聞くに至ったのかわかりません。しかし、パウロと同行していた医者ルカは、ルカの福音書とこの使徒の働きを記した人です。ルカはイエス・キリストの生涯とお言葉についての情報を、たくさん集めていて、そのルカから聞いたと考えるのも良いと思います。ともあれ、パウロはこのお言葉を、エペソの長老たちに覚えておいてもらいたい主の言葉として贈ったのです。このお言葉の意味を考えましょう。

まず、「受ける」という言葉ですが、聖書のなかにおいても、良い意味で用いられることが多くあります。たとえば、洗礼を「受ける」、赦しを「受ける」、慰めを「受ける」とかいった場合は、主から受けるのですから、好ましいことです。しかし、たとえば「報いを受けてしまっている」(マタイ 6:2)とか、「今は金を受け、着物を受け、オリブ畑、ぶどう畑、羊、牛、しもべ、はしためを受ける時であろうか」(Ⅱ列王 5:26)とか、「あなたがたは生前に良い物を受け」(ルカ 16:25)言った時は、あまり良い意味では使われていません。

一方「与える」という言葉は、聖書のなかでは圧倒的に神が与えてくださるという意味で用いられることが多いです。たとえば、「それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」(エレミヤ 29:11)、「主は与え、主は取られる」(ヨブ 1:21)などは、主が与えてくださる事が示されています。

しかし、使徒の働きで言われている主の言葉の「与える」というのは、人が人に対して「与える」ことを意味していることは明らかです。「受けるよりも与える方が幸いである」というお言葉は、人が人に「受け」、「与える」といった事について言われていることがわかります。私たちの実際生活において、人から「受ける」ことがあります。そして、喜んで「受ける」ことは大切です。しかし、「与える」というのは、私たちの心から生まれていく行動です。箴言 21:25、26 には、なまけ者が欲望に明け暮れるのに対して、「正しい人は人に与えて惜しまない」とあります。また、「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」(マタイ 10:8)、「与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。」(ルカ 6:38)ともあります。与えるとは、私たちが所有している能力、知識、財などを惜しみなく用いることです。与えることは失うことではありません。与えることには得も言えない喜びをもたらします。主はその妙味を教えて下さったのです。そして、パウロもその重要性を語り告げているのです。与えることが上手な人は、その妙味を味わっているのでしょう。私たちの日常生活においても、「与える」ことが心がけていきましょう。教会の人々へも、家族にも、友人にも、祈りつつ、ふさわしく「与える」という行動が備えられていきますように。